

## 保健室における子どもとのかかわりと役割

～保育と養護教諭との連携～

養護教諭 永見 智佳子

### はじめに

子どもたちが「保健室」という場所とかかわるという機会は、まさに幼稚園という集団の場が初めてであろう。園生活の中ではさまざまな環境（人・物・空間）とのかかわりがある。その多くのかかわりの中で繰り広げられる出来事において子どもたちは、様々な表情を見せてくれる。そのような中で、保健室という場を求めてやって来る子どもたちは、少なくないように思う。

子どもたちにとって保健室といった一つの空間的環境、また、そこにいる養護教諭の存在がどのような意味を持ち、それらに対して子どもたちが何を求め、何を期待しかかわりを求めてやって来るのかを、子どもたちの日常の様子をエピソードを交えて振り返り、感じながら、養護教諭はどのようにかかわり、どのように対応すればよいのか、つまり保健室の役割とはどのようなことなのだろうか、ということ（もう一度）ここでは見つめていきたいと考える。

#### (1)＜保健室での子どもとの関わり＞

子どもたちは、何を思い、そこに何を求めて保健室にやってきているのだろうか。次にあげる事例(1)では、子どもと養護教諭との一対一のかかわりから、子どもたちの心の様子の変化を探ってみた。

##### ①～登園後間もない子どもと養護教諭との一対一の関わり～

事例 a.

さとし：4歳児（3歳児からの進級児）11月上旬～  
 「おはよう」といって保健室へ入ってきたさとしは、部屋のスチームの前にすがり「きょうはさむかったね」「きょう（幼稚園に）来たの一番だった。いつもが一番じゃないけどね」といったごく軽い会話をする。養護教諭が電話対応で会話ができなくても、必ず2、3分在室すると、「じゃあねえ。」といって手を振り保育室へ向かう。／こういったような日がほとんど毎日続いている。

### 事例 a. からの気づき

本園では、欠席届けの連絡を保健室の電話で受けている。そのため、遊ぶ約束をしていた友達がまだ登園していないと、欠席ではないかと心配になり「今日〇〇ちゃん来る？」と、確認に来る姿がある。また、自分の学級の欠席者をいち早く知り、学級のみんなに教えてあげたいと思って、「今日のお休みだれ？」と、息を切らせてやってくる子どもの姿もある。そのような朝の入れ替わり立ち代わりのかかわりの中で、さとしのような子どもの姿もある。彼は特別不安定で心配事があるといった様子でもなく、友だちとも関わって遊ぶこともできる。このような子どもが保健室にかかわりを求めて来るのには、どのような意味があるのでしょうか。

担任の先生とはまた違う、別の教職員にも親しみを持ってかかわることが、その子どもにとっては遊びにとりくむまでの心のリズムの一つであって、朝のにぎやかな時間をゆったりとした保健室で「一対一のかかわり」（人間関係）を持って過ごすことは、彼の気持ちを落ち着かせ、「安心感」を生み出す場所となっているのではないだろうか。この事例に見られるさとしのように、園内の様々な人に親しみをもってかかわることで、ゆっくりと一日の生活に入っていく準備をする「一時の居場所」を持つ子どももいるのである。そうだとするとこのような親しみを持ったかかわりも子どもによってはとても大切であるように思う。

- ・保健室での「一対一の関わり」（人間関係）が「安心感」を生み出す。

### 事例 b.

ゆかり：（5歳児）

「頭が痛い…」／身体に触れてみると熱いわけでもない。「熱は無さそうだけど体温測ってみようか？」／「熱はないんだけど…ここ打ったの。」と以前の打撲跡をみせる。／「あっ本当。打ったとき痛かったでしょう。大分治ってきたね。」／「押さえるとまだ痛い…」／「打ったところはすぐには治らないよ。あと二日くらいしたら痛いの治るかな。」／「ねえ。ちょっとこっち来て。」／「どうしたの？」／「いいから。」／「何か教えてくれない？」／「まりちゃんたちと遊びたいんだけど、恥ずかしくて言えない。」／「恥ずかしくていけないの？」／「恥ずかしいんだもん！」／その後、恥ずかしいから言えないんだと訴え続け、保健室から廊下までは出てみたものの、別の友だちを誘って遊びに行った。

### 事例 b. からの気づき

ゆかりは最初は身体の変調を訴えて保健室を訪れているが、話していくうちに、本当は「友だちに自分の気持ちを伝えることが恥ずかしい」といった内容に変わっている。実際、気持ちのトラブルから起こる、心因性の身体の異常もあるため、子どもの訴えを軽く聞き

流してはならないと思う。子どもが保健室を訪れるといった行動にまず注目し、その子に受容的にかかわり、不注意な言葉や態度で子どもにバリアを張らせないようにする注意が必要であると考え。その訴えの裏には何があるのか常に読み取ろうとすることによってはじめて、その子の訴えの本質に気づくことができるのではないだろうか。

ところで、この場面では、恥ずかしくて言えない理由がとうとうつかめなかった。しかし、ここではその理由を探り、解決することが目的ではなく、子どもの訴えを受け入れることによって、不安を取り除くことが大切なのではないだろうか。

・人とかかわるのに苦手意識（不安感）を持ったため、理由をつけて来室し、一对一の関わりによって安心感を得、遊びに始動する。

子どもたちは、それぞれがなんらかの不安感をもって保健室を訪れる。そこでの養護教諭との一对一のかかわりは、子ども達の不安感を安心感に変えるという機能を持つのではないだろうか。（a, bの事例から）

一方、保健室でのかかわりは、子どもと養護教諭との一对一のかかわりだけではない。次にあげる事例(2)は、保健室での園児同士の新しいかかわりの生まれる場面である。

## ②～新しい関わりが発生（他の園児との関わり）～

事例 c.

「ここけがしたの。」といって入ってくるが、すぐに「カットバン貼って！」という3歳児のみか／「大丈夫だよ。もう血が止まっているでしょう。あとはだんだんと茶色のかさぶたができるからね。カットバンを貼らなくても、みんなの足は貼らないほうが早く治るんだよ。」と話している横から／「そうだよ。すぐに治るよ。」と、お姉さんらしくアドバイスしている4歳児のまいこ（去年はまいこちゃんも出血もしていないのに「カットバンはって。」と、私を困らせていたのに…） //

事例 d.

なみ（4歳児）

「あたしね。みんなにいじめられるの」と涙を流しながらやってきた。／「みんなにいじめられるの？」／「うん。何にもしてないのに私ばかり悪者なんだよ」／「何もしないのに？」と話していると、年長組のともえが入ってきて、なみを見て「この子どもしたの？」と近寄ってきた。／「あんなみと同じマークだ！ほら一緒だよ！」と名札の横についた個人マークが一緒であることに気づいたようだ。／「あっほんとだ。あな

たもとんぼマークだ。まさゆきくんもだよ。」／「えーっ。どこどこー！」と、なみはともえと一緒に保育室のほうへもどっていった。〃

#### 事例 c. d. からの気づき

事例c. の保健指導の場では、「のどが痛い」と来室していた4歳児まいこの助言で、3歳児みかはじっと自分の擦傷を見て、「そんなもんかなあ、お姉さんに言われるんならしかたがない・・・」と消毒だけ受けて友達と戻っていく姿があった。その後、まいこは付き添ってきていた友達と一緒に得意げに遊びに戻っていった。

まいこは、おねえさん意識を持つことによって、自分に対して自信がついたのだろうか。不安であったストレスからのどが気になるといった様子も、みかとかかわった後には消えてしまっている。

事例d. も同じことが言える。嫌なことがあってその不満を養護教諭に話して全面受容してもらいたかったのだろうが、同じマークのともみとの出会いにより、その不安、葛藤は消えてしまっている。(もちろんただのけんかではなく、本当にいつもなみばかりが意地悪をされているのだとしたら、それはしっかりと指導していくべきことである。どうしてなみがみんなにのけ者にされるのか、悪者扱いされるのかといった問題解決をしても良かったのかもかもしれない。ここでは、大人とのかかわりの中での安心感ではなく、子どもたち同士でかかわることで、安心感を得ることができた。そして、子ども同士が保健室という場をかかわることにより、新しい関係が生まれるきっかけともなっている。ここでの養護教諭の役割は、保健室という場のよりよい雰囲気づくりと、見守る役目、ということになるといえる。

何か、どこかに依存し続けるのではなく、自分の足で進んでいける、自立していけるようなかかわりや援助が大切であり、そうした中でも困ったときに、振り向いてくれる人がいるということは、子どもたちにとって、人を信頼する基盤をつくっていくのではないかと考えられる。

・人間関係などに不安感を持って来室しても、そこで他の子どもとの新しい関わり(人間関係)が生まれるのが保健室である。

#### (2) <保健室から見た今日の子どもの姿《現状》>

以上のエピソードは日常よく見られる子どもたちの姿である。その現状は、次のような子どもの実態を映しているものと思われる。

##### \*心の不安定さ

- ・ちょっとしたけが(軽い打身)などでも不安になり、何か手当てを求めて来室する姿が多くみられる。けがをきっかけに大人との一対一の間係を求めているように思う。

(大人との会話などは上手くできるが、同年齢の友達の中へ入っていくことが上手くできない子どもが目立ってきている。)

\* 人とのかかわりの中での葛藤や苦手意識

- いろいろな年齢の子どもたちがかかわり合う姿、なかよしの友だちと遊ぶ姿がよく見受けられる反面、友だち間のトラブルが発生した際、相手に自分の思いを伝えられないなど、人とかかわることに苦手意識をもっている子どもが多くなっている。
- 恥ずかしくて自分の思いが相手に伝えられない。
- どうかかわっていいのか分からず、遊び（集団）の中に入れない。

(3)～ま と め～

子どもたちがの集団の中でそれぞれ経験する様々な出来事（そのひとつひとつの経験の中から起こる葛藤・迷い・整理など）は、それぞれの子どものにとってどう映っているのか、それはその子ども一人一人によって違っている。自ら問題を乗り越えていける子ども、誰かの影に隠れてしまう子ども、知らないふりをする子ども、周囲に流されてしまう子どもなど、一人ひとり違う姿や歩みを見せるなかで、今、経験していることへ目を向け、どのような支援が必要であるのか。幼稚園の中で生活をしていく子どもたちがどんな現状と課題をもっているのかを私は保健室という1つのウインドウから知りえることから、今、養護教諭にできることは何かをみつめていきたいと思い、日々子どもと共に生活を送ってきた。

保健室では、いろいろな表情を見せる子どもたちと出会ってきた。幼稚園の人的環境は幅ひろくあり、それぞれとの一対一でのかかわり、また複数（本人と本人を囲むさまざまな人たち）でのかかわりの中で子どもの中に様々な心の動きが見られた。養護教諭と一対一のかかわりを求めてやって来る子どもたち。しかし、そこではその関係だけではなく、他の子どもたちとの新しい関係が生まれることも理解できた。人との関わりに苦手意識を持つ子どもが増えている中、保健室での役割も一層大切になってきているのではないだろうか。

**子どもにとって保健室の役割とは・・・**

保健室は子どもたちにとって安心して過ごせる場所となる空間・人的環境であり、一時の休まる場所であることはとても重要なことである。それだけに終わらず、子どもたちが自ら次へと進んでいく（自立をうながす）ための支援の場所であることも大切であるとわかった。

子どもたち一人一人のことをよく知り、理解するためにも、担任や保護者との連携を密にしながら訴えの本質を見極め、支援していくことが保健室と養護教諭にとって必要であると改めて確認することができたように思う。

保健室が、

～子どもの心のエネルギーとなる”安らぎ”を与える場所であるように～

## 家庭・子ども・幼稚園が響き合いながら歩む幼稚園を求めて

副園長 福田 郁子

### はじめに

幼稚園では、今、子どもだけでなく保護者も含めた生活を考えていくことが求められている。子どもたちの成長を願い、保護者と幼稚園がいっしょに子育てについて考え、力を合わせ共に歩いていく、そんな幼稚園の姿を思い描きながら今年度の取り組みを振り返ってみよう。

### ○幼稚園の活動に家庭・保護者の力を活かして

#### ・附属幼稚園秋祭り

子どもたちが取り組んでいたお店ごっこやパーティーから「附属幼稚園のみんなでお祭りがしたい」という思いが広がり、附属幼稚園の秋祭り開催へとつながっていった。保護者に協力を依頼し、家庭・子ども・幼稚園がいっしょになって秋祭りを創っていった。初めは、幼稚園と保護者の描くお祭りのイメージが違っていたが、実行委員会を重ねしっかり話し合っていたので共通のイメージで秋祭りの活動を共有することが出来た。活動に至る過程を大切にしたので、幼稚園の考えを理解してもらい、子どもたち一人一人のがんばりや良さを認め励ましてもらうことができたので、子どもたちも意欲的に活動すると共に満足した気持ちで活動を終えた。

また、保護者企画の各コーナーも、温か味のあるものばかりで子どもたちにとってとても楽しい秋の一日であると共に親子がふれあいを楽しむひとときでもあった。

秋祭りの活動は、幼稚園での生活や子どもの姿の一端を伝えることが出来たとともに、保護者同士が出会い、親しくなっていくよい機会にもなったことが、活動の後の保護者へのアンケート結果より感じる事ができた。

#### [秋祭リアンケート結果より]

- ◇子どもにとっても親にとっても楽しく有意義な秋祭りだった。
- ◇全てが手作りで準備は大変だったと思うが、心のこもった温かみのあるそれぞれのコーナーだった。
- ◇保護者がセッティングしたものに参加するだけでなく、子どもが主体となってお店を開いていたのも本園らしくてよかった。
- ◇日頃あまり関われない色々なクラスの友達と様々な形で関わることが出来て良かった。

◇子どものお店は、様々な工夫や子どもらしさにあふれ、楽しかった。時にはお客さんとなり、家族みんなで楽しめたのが良かった。

◇この取り組みについて、はじめにアンケートもあり、役員の方だけでなく全保護者の考えをもとに開催できたのでよかったのではないかな。

◇子どもが懸命に取り組む姿を見ることが出来て、親としてうれしかった。

◇何らかの形で保護者みんながもっと参加するようにしたほうがよいと思う。



<秋祭りより>

#### ・子どものくらしと花壇の花

P T A環境部を中心として花壇に花を育ててもらっているが、四季を感じることができるとともに花は子どもたちのくらしにすっかりとけこんでいる。「花の蜜を吸う」「本物の花を使ってのお花屋さんごっこ」「色水遊び」「誕生日のケーキやプレゼント作りに使う」「演奏会の花束にする」「園舎のコーナーを飾る」など、様々なところで活用させてもらっている。植える花は、子どもたちが遊びに使いやすいような花をという観点から保護者といっしょに選ぶようにしている。また、「土作り」「花苗植え」「水やり」「花がら摘み」などの作業を保護者に広く呼びかけて協力してくださる人を募っているが、作業をきっかけに親同士が知り合い親しくなっていく場にもなっている。



<朝顔の花で色水作り>



<花飾りのバースデーケーキ>

### ・誕生会にサークル「おもちゃ箱」発表

誕生会に合わせ音楽や劇などの発表をお願いしているが、子どもたちが楽しんでくれるようにと色々工夫した取り組みに、子どもたちはとても喜び、くいいるようにみつめている。

活動を通し保護者の特技が活かされ、参加している皆さんは自分の力を発揮することでも生き生きとした姿が見られる。

また、サークルは保護者同士が出会い親しくなっていく場ともなっている。

### ○保護者と幼稚園との信頼関係を深めていくために

#### ・参観日の持ち方

##### 「一日保育参観日」

幼稚園の教育や考え方、子どもたちの園での生活の様子を知ってもらいたいと考え参観日を計画しているが、たくさんの保護者がいる日はどうしても普段と違う子どもの様子になりがちである。そこで、子どものより自然な姿を保護者に見てほしいと思い、参観日の期間を一週間程度設け、保護者の都合の良い日に5、6人ぐらいずつで保育に参加してもらうことにした。自分の子どもの様子だけでなく他の子どもたちの様子も知るにより、子育てにおいて気持ちにゆとりをもってほしいと願っている。

参観後の懇談も人数が少ないので話しやすいようである。保護者の考え方や気持ちを理解し、保護者が望んでいることや不安に思っていることなどを把握し、お互いに信頼し合い、一緒に子育てについて考え歩いていくためには、気楽に話せる機会や場の工夫がより一層求められる。

#### 保護者の声

初めて一日保育参観日を終えて、とても楽しい経験をさせていただけたと喜んでいきます。子ども同士がまだまだ探り合いをしながら遊んでいることがよく分かりました。

また、その日にたまたまつかまえたトカゲが死んでしまい、1つの生命の大切さを直接子どもたちが受けとめる場面を見て、純粋な心を感じることができました。

自由に友達と遊んでいる中で、はしごを渡れない友達を先生を呼ばずに自分で助けてあげる子どももいて、子どもたちだけでも自然に仲間意識ができてきているんだなあと関心しました。

これからの幼稚園生活の中で、もっともっといろいろな経験をし、感じ取ってくれればと望んでいます。

#### ・フリートークの会

今年度も昨年度に引き続き、毎月一回、その月の誕生会の日（誕生日が始まる前の一時間）

に研究室で実施している。3・4・5歳児の誕生児の保護者を対象とし、自由に語り合う中で、子どもたちの成長を喜ぶとともに親の思いや悩みを語り合う場としている。

「幼稚園の広い環境に助けられ、自転車にすぐ乗れるようになったことがとてもうれしい」という保護者の声に、改めて本園の恵まれた環境について考えるとともに、子どもたちが乗る自転車の整備に努めた。

この会を通し、子どもと保護者の顔がつながるので、その後お互いに声がかげやすくなる。

また、この会で得た園児の情報や保護者の願いは、担任に伝え幼児理解や保育の手がかりとなるようにしている。

しかし、出席者の数もまだそう多いとは言えないので、参加してよかったと思われるように会の持ち方や内容を工夫していく必要がある。そして、幼稚園への要望等も、もっと遠慮なく伝えてもらえるように、園と保護者との距離が縮まり、信頼関係にプラスとなるような会にしていきたいと考える。

#### <保護者との連携による様々な活動>



<親子で交通安全教室>



<園外保育>

少子化、核家族化などの社会状況から、保護者も子どもも色々な人とのかかわりが希薄になり、家庭や地域の中で人間関係を創っていくことについて学ぶことが出来にくくなっている。子育てにおける不安や悩みを相談する人や機会がない場合、保護者の心の動揺が子どもにも大きな影響を及ぼす。保護者の心が安定し、子どもとゆったりした気持ちで向き合っていけるよう、日常的に保護者の思いを受けとめいっしょに考えていけるようなよい機会を考えていかねばならない。



<読み聞かせの時間>

家庭との連携は、子どもの成長を願いお互いに高め合い育ち合うものでありたい。今後も家庭とのより充実した連携を考えていきたい。